

イスラームは何とぶつかっているのか

内藤 正典¹

中田 考²

司会 松山 洋平³

「IS（イスラーム国）は政治に〈意識高い系〉の人たちの一つの姿」——こうとらえると、遠いシリアの状況が、急に日本社会に重なって見えてくる。平和構築に宗教間対話が役立っていないのはなぜか。日本人にまったく見えていない中東情勢の内幕や、根本的な問題の所在について、イスラーム地域研究とイスラーム法学の第一人者が論じあった。司会を含む全員がシリアでの居住経験をもつ。

2015年10月3日実施

¹ないとうまさのり：同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授

²なかたこう：同志社大学客員教授。一神教学際研究センター客員フェロー

³まつやまようへい：東京大学東洋文化研究所・日本学術振興会特別研究員 PD

奇跡の和平会議

松山 今日は、中田考先生と内藤正典先生のお二人に「宗教間の対立と融和」というテーマをめぐって、現在の中東情勢・世界情勢を踏まえつつ、お話を伺います。まず、お二人を前にして「宗教間の対立と融和」を考える時に私が思い起こすのが、2012年に同志社大学で行われた国際会議「アフガニスタンの和解と平和構築」^⑩です。この会議では、日本ではいわゆる「テロリスト」と見なされているタリバンの代表が参加し、まさに紛争当事者が対話をする、日本では類を見ない国際会議でした。この会議は、日本が国際的な平和構築に独自の貢献をした好例だったと思います。ところで、現在シリア・イラクにおいて今世紀最大の人道的危機が発生していますが、この問題について日本はどのような形で、どのようなレベルで貢献をすることができるのか、という点からまず、お考えを伺います。

内藤 「アフガニスタンの和解と平和構築」の会議は、2012年の6月でしたよね。タリバンは当時のカルザイ政権とアフガン国内では会うことができない状態でした。日本での会議が成り立ったのは偶然が重なったせいなんです。まずタリバンについては中田先生がカタールまで行って交渉して下さったから、タリバン指導部からOKが出たんですよ。あと、ヒズブ・イスラミー^⑪とかが出ている。タリバン政権の時のパキスタン大使のザイーフさんも来るし、そのあたりだけ見ると「テロリストを集めている」という風に見える（笑）。でも確かその後なのですけれど、カルザイの大統領府からも、高等和平評議会の事務局長だったスタネクザイさんが来ると連絡が入った。それで役者が揃った。奇跡的でした。中田先生がタリバンと接触したけれど、すぐには色よい返事はくれなかったですよ（笑）。

中田 あの時は本当に色々な偶然が働いていました。日本の外務省は外か

らは一枚岩に見えますけれど、実際には個人の集まりなので色々な思惑がある。たまたま担当官が内藤先生と関係のある方で、その間で上手く話が通じました。

内藤 一番驚いたのは、当事者同士が顔を合わせると、とにかく話すんですよ。会場の後で懇親会に行って、汚い飲み屋で鍋を囲んだというのは奇跡でしたねえ。

中田 その後で、一緒に礼拝するんですよ。

内藤 そうそうそう。

中田 直前にアフガン政府の御手盛りの和平機関の和平高等評議会議長の議長のラッバーニー元大統領がタリバンにより爆殺されたのですが、その時にその場に居合わせて大怪我をおったスタネクザイ大統領顧問が脚を引き摺って政府側代表として参加し、爆殺したタリバン側の代表とふつうと一緒に礼拝するんです。

内藤 その時メッカの方角に、なにしろ居酒屋だから女性の写真があったので、まず元タリバンのザイーフさんが重々しくそれを剥がした（笑）。で、一緒に礼拝してましたよねえ。居酒屋で向かい合って一緒に食べているわけだから、話のひとつでもしなきゃならない。スタネクザイさんの前にタリバンのディン・ムハンマドさんが座っている。直接、和平に関する話はしませんでした、会議でひとつ一致したのは、外国勢力が撤退しなければアフガニスタンに和平はないということでした。

中田 そうですねえ。結局、アメリカ軍の空爆で民間人がずいぶん死んでいますから。あの会議が非常に画期的だったのは、カルザイ政権側だけでなく、タリバンも、正式名称であるイマーラート・アフガニスタン・イスラミーヤ、つまりアフガニスタン・イスラーム首長国という「政府」を名



乗っていたことです。タリバンは、自分たちこそがアフガンの正統政府だと主張しているのです。だから、対話を成立させるには、主催者の我々は中立を守り、両政権の代表に来てもらうという形にする必要があった。要するに、「カルザイ『政権』が来て、タリバンという『武装グループ』が来て」という態ではまったく意味がないんですね。タリバンにその正式名称で参加してもらうということを、我々も最後まで主張していたので、その点でも、タリバン側の信頼を得て、主催者は中立を守ろうとしているのだという誠意が伝わった。

そんなことを言うと、タリバンをカルザイ側と同じ「政府」扱いにするのは、テロリストの言い分を認めたことになる、と非難されそうですが、和平のために紛争の当事者同士を引き合わせるには、その方法しかなかったんです。我々は今の国際秩序を当たり前だと思ってしまっていますけれど、実はタリバン側にはその枠組みはなく、もともと自分達が正統政府だと思っている。タリバンは、「カルザイとは対話しない」と言っているのですが、これは実は「カルザイ政権を認めてその代表と対話する、ということとはできない」と言っているのであって、カルザイが個人で来るならアフガニスタン人としていつでも受け入れると、繰り返し明言しています。そのことをカルザイ側はわざと否定して、「タリバン側が（対話を）拒否

している」と嘘を言っているんです。アフガニスタンの今の政権とタリバン政権が政府同士という立場で話をするのも、あるいは個人としてタリバンの人間とカルザイ政権の人間が話をするのも、どちらもタリバンの側は認めています。カルザイ政権が「武装グループタリバン」と話をする、というのでは、政府がテロリストに恩赦を与える、ということにしかなりませんから、和平交渉にはなりません。タリバンを和平交渉の対等なパートナーとして認めず、対話を拒んでいるのはむしろカルザイ政権なわけです。

内藤 彼らはものすごく仁義を重んじる人たちです。私はあの時タリバンの側に言ったんですけど、「今はウチの学生をあなたの国に派遣することはできないけれども、いつか、アフガニスタンに興味を持って行く学生がいたら、ウチの三角形三つの徽章（同志社大学の校章）を見たら、撃つなよ」って言ったら「撃たない」って言いました。「ちゃんと客として遇するから」と。仁義を裏切っちゃいけないですよ。私達は別にムスリムじゃない、それは分かっている上でそう言ったんです。もう一つ、この会議は（キリスト教の）礼拝堂、チャペルで開催したんですが、それについても誰も何も言わなかった。

中田 そういう意味では、「宗教上の筋を通しただけでできた」ということがすごく重要なんですね。お金とか使ってません。（飛行機の）チケット代くらい（笑）。宗教団体とも関わっていない。本当にただ筋を通しただけで、こういうことができたんです。

いわゆる「宗教間対話」はなぜ効かないのか

松山 日本の宗教界でも、世界平和を志す宗教間対話が、さまざまな機会に開催されます。ただ、基本的に、宗教に関連して発生する暴力の責任を「テロリスト」という他者に押し付けるのみで、（自己が属する集団に内

省を促すような) 自己批判的な言論はほとんどありませんし、紛争当事者、たとえばタリバンを呼ぼうという発想は皆無と断言したいと思います。そうした形で開催される宗教者会議あるいは宗教間対話は、間接的な形であれ、世界平和あるいは宗教間の和平につながる可能性はあるのでしょうか。

中田 「ある」とも「ない」ともどちらでも言えます。一応、レトリカルに「ある」というところから始めたいと思います。最初に内藤先生と私が知り合ったきっかけなんです、同志社大学に CISMOR、一神教学際センターというのができて、そこでこれから宗教間対話をやっていきましょうという中で、「ヨーロッパにおけるイスラーム問題」が重要だ、となった。そこで、イスラーム世界を知った上でヨーロッパのイスラームの研究をされていた内藤先生をお呼びしようということになった。そうしてCISMORの宗教間対話を通じて内藤先生と同志社の間にご縁ができて、その結果、同志社大学にグローバル・スタディーズ研究科というのができて、内藤先生に来ていただいた。ですので、それをもって(宗教間対話に)意味があると言えると思います(笑)。

内藤 ハッハッハ(笑)。

中田 まじめな話、宗教間対話は、まったくイスラームについて何も知らなくて、ムスリムはみんなテロリストだと思っている人間に、イスラームには平和的などころもあるんだよって伝えるようなレベルでは確かにあってもいいと思います。けれども、そこから何の進歩もないというのが現在行われている宗教間対話の問題だと思いますね。宗教間対話の推進者たち自身は、自分たちのやっていることには啓蒙以上の意味があると思っているようなのですが、それはもうどうしようもない勘違いだと思います。

内藤 私は信者じゃありませんから、宗教に名を借りた形でなぜ暴力が発生するのか、そこを知りたいわけですよ。宗教家たちが集まってきてみんな平和と愛を説いてくれるのは結構ですけども、それで十分だった

ら誰も苦勞はしないわけで。その先にどういふ貢献をするんですかっていうことになる、みんな口をつぐんでしまう。そういう宗教間対話に意味があるとは…。

中田 そうですね。宗教間対話のどこに限界があるかという、「宗教と宗教」の関係を枠組みにしているところです。現代というのは基本的には世俗化された世界ですので、宗教と宗教の間の亀裂よりも、ひとつの宗教の中の「世俗の言葉」と、「原理主義」——って言葉は嫌いなんですけれども——の言葉との裂け目の方が、実際には大きいんです。なので、原理主義の方と対話ができない人たちが集まってもまったく意味がない。しかし、現状として、宗教間対話に参加する人たちは、自分たちが正しく、自分たちと合わない人はすべてテロリストだとして糾弾するというような流れになっています。原理主義と呼ばれる人たちを最初から排除しています。そんな彼らの言うことは相手の耳には届きません。

それに、本当の意味で宗教の争いというのを考えている人間はあんまりいないです。たとえば、ヤズィーディー教徒の問題というのがありますけれど、ではヤズィーディー教徒が何を信じているのか、というのを知っている人が誰もいない（笑）。それで、「かわいそうだね」とか言っている。実は、彼ら（宗教間対話の担い手）は、宗教の問題でなく政治の問題を語っているのです。「あの人たちがいきなり殺されたり難民になるのは困る」という政治の話をしているんですね。

しかし、政治の話をする時はリアリストに考えないといけないのですが、宗教間対話はそこに対応できていない。特に今の我々の枠組みの「国民国家」っていうのは、基本的には他の国民国家は全て敵という前提ですので、敵と敵との関係法的に定めるというのが外交の基本になります。そこまでリアルに認めて、「敵である」「根本的に共約不能な価値観を持っている」集団同士がどうやっていくのか、その間でどう和平条約を結ぶのか、それを考えていくことが今求められている。

今、国際秩序と言われているものは、70億人の人類の殆どとは無縁で、先進諸国のエスタブリッシュメントの一部の外交官、国際法学者、国際機



内藤 正典氏

現代イスラーム地域研究、ヨーロッパにおける移民問題研究、トルコの世俗主義研究などの第一人者。

2015年、トルコ等での在外研究からの帰国直後に本対談を収録。トルコ滞在中、夜中に海岸近くの家の前をヨーロッパに向かうシリア難民が続々と通るといふままなましい経験をされる。シリアなまりのアラビア語で話しかけ、(これまでの世間的イメージからすると、“難民”らしからぬ)バックパッカー姿の大学生風若者に宿をお貸しになったとのこと。

シリア系アラビア語を話せるのは、1981～83年にシリアのダマスカス大学に留学されたため。

シリア人について(対談から):「……シリア人はいい意味で非常に洗練される。商売がうまいのもそうですけれど、人生をエンジョイしてて……日本と全く文化が違う、と日本人は思っているけれども、あのメンタリティは大阪なんか合うんじゃないかな……」

著書に、『イスラム戦争 中東崩壊と欧米の敗北』(集英社新書 2015年)、『イスラム—癒しの知恵—』(集英社新書 2011年)、『激動のトルコ』(明石書店 2008年)、『ヨーロッパとイスラーム』(岩波新書 2004年)年など。

関の職員などというほんの一握りの人間が作っているだけです。それと違う価値観を持っている人たちが当然いる。タリバンもそうですし、イスラーム国もそうです。実際には世界に生きている民衆はそんなものとはまったく無縁な考え方をしている。そういうリアルな認識から始めて、もう一回考え直さないといけないという段階にきている。そのために根本的に宗教・価値観を考えていく対話をするならば、宗教間対話も意味があると思

うんですけれども、残念ながらそうはなっていない。

ヨーロッパで対立しているのは キリスト教とイスラームではない

内藤 今のヨーロッパでのイスラモフォビア（イスラム嫌悪・恐怖症）の問題なんかもそうですけれども、あれはキリスト教とイスラームとが争っているんじゃないくて、「世俗」と「イスラーム」が争っているんです。フランスのような厳格な世俗主義を取らないにしても、西欧諸国はかなりの程度政教分離していますし、世俗主義の空間なわけですよ。つまり、神様は絶対者なのに、「ある空間だけは神様もノータッチだよ」と西欧諸国は言っている。その理屈がムスリムに通じるわけがない。もちろん、移住してきた個々のムスリムは、ある程度の妥協をするということはあるんですが。

フランスでは、問題は深刻な最後の最後のところまで行ってしまいましたけれど⁹、いい加減、フランス側あるいはフランス在住のムスリムも分からないといけないうのは、「講和条約を結ぶ以外ない」ということです。つまり、お互いの原理は共約不可能であるということ。イスラームと世俗主義（公的空間に宗教は存在してはいけないという国家原則）って接点ないですよ。どこまで行ったって絶対交わりっこない。ところがフランスは「啓蒙」で無理やり交わせようとする。それは無理だともう気付くべきだと思っているのですが、これをフランスの講演とかで言うの大変ですよ。非難の大合唱。

一同 （笑）

内藤 やっぱり一種の和議を結ぶ以外ないですよ、お互い敵だということを確認した上で。ところが、フランス社会のムスリムは、領域国民国家の中にいるマイノリティとしての移民という扱いになっている。そのまま

は、主権を持っている国家の方は「郷に入っては郷に従え」という態度をムスリムに対して取り続ける。その関係を、世俗主義とイスラームの和議へと転換しなくてはいけないのに、そこまで突き詰めた議論というのは宗教間対話では絶対にしない。宗教間対話はどこまで行っても宗教家同士の対話であり、片方が世俗の国家を代表しているわけでも、権力を握っているわけでもないで、そもそもそんな役割は果たせません。

もう一つの問題は、いわゆるリベラリズムの側から来るイスラームに対する敵意ですが、これにも宗教間対話は有効な手を打つことができません。この問題は、2001年以降のオランダに典型的に現れています。この場合のリベラリズムとは、「他人に干渉されない自由を尊重する」という意味です。この考えをもつオランダ人の中に、イスラームを押しつけがましい宗教だと誤解し、自由を守るという理由で、イスラームを排除すると公然と宣言する人たちが出ています。オランダ自由党のヘルト・ウィルダースなどはリベラルというよりはリバタリアンですけれども、押しつけがましい教義のもとであるコーランを禁書にせよと主張する。他者に干渉されたくないという意識は西洋社会にかなり共通してある。この点で、アメリカのリベラルとヨーロッパのリベラルには違いがあると思います。別にイスラームは信仰を人に押しつけたりしないのですが、この種のリベラリズムが出てくる場合が一番厄介で、本人たちはリベラルと自己規定しているわけですから、「相手方はリベラルじゃないから排除してもいい」という論理になってしまう。この問題についても宗教家同士の対話は何の役にも立たない。

ヨーロッパは、国によって事情は違うとはいえ、今の方向性は同じなんです。ムスリム側は疎外され続けた上に抑圧さえ受ける。彼らの応答は場合によると暴力的なものにまで発展してしまう。その段階に来ているのだという自覚を双方が——ヨーロッパ諸国側もムスリム側も——持たないと、誰が主体であろうと、対話というものは成り立たないだろうと思っています。

中田 ただ、特にイスラームの場合は講和する主体がないというのが一番

の問題です。それで私はずっとカリフ制と言っているわけなんですけれども。結局、ある程度は権力の背景がないと、もともと講和というのは力がある者の間での妥協ですから、そもそも話にならないわけですよ。

豊かな湾岸諸国が難民を受け入れていないという矛盾

内藤 もう一つ大きな問題というのはやはり、ムスリムが多数を占めている国自体が同じ構造の問題を内側に持っていることですよ。

中田 基本的には、サウジアラビアとトルコとかを除けば、全部が植民地化されていた国ですからね。一応独立はしたわけですけど、独立を進めたエリートというのは西欧の教育を受け、非イスラーム的なシステムの中で育った人たちです。彼らがイスラームを代表して話をしても、全然話が進まないわけですよ。今の難民問題だって、なぜシリア人がヨーロッパに向かっていているのか。あるいは、イスラーム圏でも貧しいレバノンとかヨルダンには行くのに、なぜお金があるサウジアラビアとかクウェートで受け入れてもらわないのか。そのことを誰も口にできない。誰でも知っていることなんですけれども、日本にいるとあまり見えてこないことです。

だから、日本が 11 人しか受け入れられないという話もありえないですし、トルコなんか 200 万人も受け入れているのでそれはそれですごいことなんですけれども、イスラームの論理からするとおかしいところがあるわけですよ。受け入れて当然のはずの国に難民が向かっていない。

私は以前にも 2011 年の時点で「人道介入」をテーマに同志社大学で開催された国際会議で、シリア内戦については「まず一番にやるべきことは、(シリア人が) 逃げられるようにすることだ」と言ったんです。イスラーム的に言っても、戦うよりも前にまず逃げるのが第一のチョイスになるわけですよ。でするので、逃げられるように国境を開く、外交的、経済的に世界でサポートするべきだ、と言ったんですけども誰も聞いてくれなかった(笑)。ビザを発給してですね、みんなが逃げられるようにする。そうす

れば、アサド政権も含めてみんな逃げてしまえるわけです。

一同 (笑)

内藤 トルコなんて面白いですよ。いまおっしゃったように、200 万人以上もの難民を受け入れていますけれど、国境を閉じろという議論が出ない。「なんで管理しないのか」と日本のマスコミに私も聞かれたんですけど、「逃げる道を残す」ということが人道的な対応なので、それを止めるっていうことはムスリムとして著しく道義に反する、とトルコ人は思っています。難民たちに対して出て行けなどという声もトルコでは上がっていません。

中田 国境というものの自体が、そもそも人道に反するんですけどね (笑)。アフガニスタンでもかつてソ連の信仰による内戦で 1000 万人以上の難民が出たんですね。その内の 500 万人以上を貧しい隣国のパキスタンとイランが受け入れたのです。当たり前のことなので騒ぎもしないわけですけど、それを考えると、普段から人権だの人道だの、ふだんは偉そうにご高説を垂れている金持ちのヨーロッパの国々がたかが 100 万、200 万人程度の難民の受け入れで何を騒いでるんだっていう気になります。

内藤 実際にはまだ 70 万人くらいです。

中田 脱出先は、ヨルダンにせよレバノンにせよ貧しい国なわけで、そんな国でも着の身着のままの人を受け入れるのは当たり前です。ヨーロッパは一応人道とか謳っているのに、何を言っているのか。

と、そういうことをヨーロッパでもイスラーム圏でも言えないことが問題なわけですよ。残念ながらみんな口をつぐんでいる。そういうことをあえて言わない宗教間対話は意味がない。という風に私は思っているんです。

ISのような「イスラームの政治化」は、 宗教のプロテスタント化・世界の民主主義化も原因

松山 次に IS 問題についてお聞きします。IS 問題は、日本では、非常に宗教的な要素が強い、「まさに宗教の問題である」というとらえ方が一般的であると思います。しかし、そうではない側面もある。どの程度、宗教的な側面が意味を持っているのかが日本人にとっては分からないところだと思います。

中田 これは非常に複雑な問題です。そもそも IS 問題があるんじゃなくて、あるいは難民問題があるんじゃなくて、領域国民国家問題がある。領域国民国家というものの存在が人類にとっての大問題だというのが私の立場です。領域国民国家はイスラーム的に問題であるという以前に、論理的にも、たまたま産み落とされた領域国民国家の違いによって国家から受けられる保護が違うというのは、フランス的な意味での全ての人間が平等に人権を持つといった概念とも明らかに矛盾しますので、普遍的な問題だと思っています。これが一つですね。

もう一つは、これはイスラーム内部の話なんですけれど、IS は「サラフィー・ジハーディー」^④というグループの一つなので、非常に大ざっぱに言えばプロテスタント的な特徴があるんです。神と人間との間には一切仲介者がいない。天使的や聖者といったものをただの被造物に貶める、そういうグループなわけです。それに対して、神と人間の間に中間的な存在を認めるコスモロジーを持っていた伝統的なイスラームのグループの方は、世俗化の中で世俗に取り込まれてしまって、墮落して力を失ってしまった。

私もすごく驚いたんですが、シリアは、アラブの中では非サラフィー的な中世的なコスモロジーが現代になっても一番強い国だったんですね。アサド政権が（サラフィー主義的な）ムスリム同胞团的なものを一切潰してしまっただけあって、アラブの中では一番伝統主義が強くてサラフィー

主義が弱い国だったんです。それがあつという間に、一年や二年で、宗教的なシリア人はほぼみなサラフィーに変わってしまった。現代のイスラーム世界は実は非常に精神性を失っている。だから、IS が出てきてしまったという問題があるんです。

内藤 「中間的な存在」ってどういうものですか。

中田 具体的にもっとも身近なのがスーフィー聖者ですね。そういう、天使たちと——天使は六信の一項ですからムスリムはみんな信じており、そこから辺にいますからね——時々コミュニケーションができる人間がいる。そういう人たちにたとえば人生相談をすとか、そういう社会があったわけです。夢の中に預言者が現れたり天使が現れたりして、ということが普通にあった世界——それが世俗化のためになくなってしまった。そうすると、宗教的な表現方法っていうともうジハードしかなくなるわけです。

サラフィー主義に目覚めたら、ムスリムは一日で変わってしまえる。昨日までバーで酔っぱらっていた人間が翌日にはサラフィーになれる。そういう一夜漬けでなったムスリムから見てさえも、「あいつらおかしいだろ」と言われる人間が、アサド政権に取り込まれた、墮落したスーフィーたちです。実際に、アサド政権側の、穏健派と言われる宗教者で、IS を非難している人間は、「IS は昨日までイスラームのことを何も知らなかった連中だ」と言って批判しています。だけどそんな IS が目覚めたムスリムを引きつけるのは、それは穏健派のお前たちが民衆から軽蔑されており人望がないからだろって話です。

一同 (笑)

中田 つまり、世界全体、イスラーム世界もが世俗化しているので、政治の領域にしか宗教性を見出せない人間が増えているということが、IS 問題の一つの原因であると考えられるのです。民主主義が世界を政治化して



中田 考氏

日本人ムスリムであるイスラーム法学者。イスラーム諸国と日本をつなぐキーパーソンとして知られる。ムスリム名はハサン。

イスラームの立場からの発言や行動が、多くの日本人にとっては不可解であったり、ともすると過激だと受けとめられたりし、2014年にIS問題が拡大したときには警視庁から家宅捜索も受けたが、対談のような場では、和やかで落ち着いた人柄が全面にあらわれる。

シリア人について（対談から）：「……難民キャンプででもどこでもですね、彼ら平気で結婚するんですね、将来がないから結婚できないとかそういうバカなことは思わない。キャンプとか私が行っても、うん、よく来たなってお茶を出されたりしてね。あの希望にあふれてる、前向きなところは学んだ方がいいです。……」

『イスラーム法とは何か』（作品社 2015年）、『イスラーム 生と死と聖戦』（集英社新書 2015年）、『カリフ制再興』（書肆心水 2015年）、『私はなぜイスラーム教徒になったのか』（太田出版 2015年）など、2015年に入ってから多数の著書や対談を刊行。

いったわけです。民主主義では全ての人間が政治的に意識が高くないといけません。でも、もともとはそうではなかった。政治というのは、日本もそうですけれど、上の人間がすることだったんです。下の人たちは基本的には政治意識なんて持たなくても生きていけた。しかし、民主主義で、全ての人間が主権者という話になって、世界が政治化していったのです。そういう構造があってIS問題が出てきていると私は理解しています。

内藤 1996年に、私が『アッラーのヨーロッパ』（東大出版会）という本を書いた時の関心は、「ヨーロッパ諸国はそれぞれ移民に対する政策は違っていたのに、なぜどこでも移民が2世3世になるにつれてムスリムとしての再覚醒が進むのか」でした。その当時でも、「昨日までは、明日は何を着ていこうか、週末のデートはどこへ行こうかとか思ってたんだ」って言っている人が「ポンッ」と変わっちゃったというのを多々目にしました。ベルリンのモスクとかで。動機はさまざまなのですが、起きると一夜にして変わってしまう。で、変わった時には、おっしゃる通りで、「心で神を知ろう」みたいな部分がすっぱり抜けていますよね。いきなり頭から入る、カタチから入る。そうすると、ジハードの対象となる実践も幅が広がったはずなのに視野が狭くなっていった暴力的ジハードの方に一挙に行ってしまう。その現象はヨーロッパで見ていると非常にクリアだったんですけど、中東の側もそうなんですけどね。

「ムスリムは豚を食べない」から入るから、 イスラームがわからなくなる

松山 ヨーロッパだけではなく、日本でも、「ムスリムを排除すべき」という意見を持つ人はいると思います。現時点ではムスリムはほとんど日本には存在はしませんが、これから増えてくる可能性はある。そこで、「ムスリムとの共存」という問題ですが、中田先生はこの点について悲観的でいらっしゃるようです。「日本人がイスラームに無知なのは当然である」し、「ムスリムを差別するのもある意味で自然なことだ」と日頃からおっしゃっています。一方で内藤先生は、イスラーム世界と日本が衝突しないようにと、多くのご著書の中で日本人にわかりやすい切り口からイスラームについて解説されています。一見するとお二人はこの点についてベクトルが逆を向いているのですが、この点についてどうお考えでしょうか。

内藤 ここ10年くらいの私の研究の主題は、イスラームと非イスラーム

の社会の間でどうやって衝突を回避するか、ということになりますが、こういう研究は、たぶんムスリムだとかえってやりにくいと思います。イスラームは平和と愛の宗教だ、と説くだけになりがちです。私も、各国でイスラーム指導者の話を聞くことがありますけれど、非常にいらいらさせられます。それで上手くいくくらいだったら……と。非イスラーム教徒が何を分かっているのかを理解していない。

日本人の側も、先日も、TV 番組でキャスターが、「日本がシリア難民を受け入れないのはおかしいって言うけれど、文化が違うから、門戸を開いても彼らは日本には来ないでしょう」とか言っていました。最初から「人」を見ていない。ムスリムといっても酒を飲む人間はいくらでもいるし、礼拝しない人間もいるし、逆にすべての信仰実践をする人もいる。そのところを、丁寧に説明せざるをえない。だから、イスラームについての講演をするときには、ムスリムはこういう人間だ、決め付けないでほしいということを先に言わなければいけない。ムスリムは豚肉を食べないんですよ、って知っているつもりになる人がいますが、食べるものが豚肉しかなかったら、食わずに死ぬわけじゃない。そういう場合には食べてもいいってコーランに書いてあるじゃないかと。だから、アルコールと豚を禁じているってことを言うより先に、無理強いされたり他に手段がなかったら食べてもいいってコーラン書いてあるんだということを、イスラーム教徒の像としてまず見せなければいけない。教科書的に六信五行から始めて、ムスリムはあれしちやいけな、これしちやいけなってなっているんだ、と説明すると、多くの日本人は「まったく主体性、理性を認めない宗教だ」って見ちゃうと思うんですよ。

最近授業でよく使うのは、イスラーム法での刑罰の例です。同害報復って残酷だと日本人は思いますよね。しかし、日本と比べてイスラームの方が野蛮だと本当に言えるだろうか。京都で何年か前に、亀岡って所で悲惨な交通事故が起きて、登校中の子供たちが何人か殺されましたよね。しかし、危険運転致死傷罪ができて最近量刑が重くなりましたが、この事件では適用できなかった。遺族は納得できるわけがない。たとえ懲役 20 年だって納得できるはずがない。しかし、日本のシステムでは遺族は控訴でき

ないんです。控訴できるのは検察官であって遺族じゃない。この事件でも運転していた人が未成年だったということもあって判決は5年から9年の不定期刑でした。それで検察は上告しなかった。その検察官とは誰であるか。法務省の公務員です。つまり、刑罰に関してのプロセスを日本は国家に委ねている。実際、刑事事件で量刑に不満があっても遺族は何もできない。

それに対して、イスラームの場合はたしかに同害報復にはなっていますが、しかし同害報復の権利は遺族にあります。これは野蛮だと言えますか？日本の方が公正なシステムだと思いますか？と問うと、ようやく聴衆は少しずつ納得する。自分たちが信じているところの法規範が、必ずしも常識でないことに気付くし、イスラームが必ずしも非人間的な刑罰を科しているとは言えないことに気づいてもらえる。

トルコにいる頃に感じたんですけど、罪を犯したりして刑務所暮らしした人が帰ってくると、みんなで温かく迎えますよね。「よく帰ってきた！」みたいな。あの感覚って日本人にはないじゃないですか。一家のうち誰かが罪を犯したら、一家全員バッシングの対象になる。でもそれをしないところがムスリムにはあります。

西欧人はイスラームの刑法では犯罪者を鞭で叩くので残虐だと言うけれど、でも叩いた後は、その人を家に帰すんです。家族の身になってみれば、亭主が罪を犯して刑務所に入ったために食い扶持を失われてしまうのと、本人だけが鞭で叩かれて帰ってくるのとどちらが公正か。日本の法律は、罪を犯した人以外も、結果として罰してしまう。それを言うとうまく、日本の聴衆も「ああそういう面もあるのか」とわかってくれます。もちろん「でも百叩きは痛いよな」とかも言いますが（笑）。

一同 （笑）

内藤 ただそこで説明に困るのは、実際そうしているかっていうと、ほとんどのムスリム諸国は今それをしていない。欧米諸国の圧力があつたり、いろんなことがあつたりで、実際にイスラームの法に基づく刑は執行しな

いことが多い。ただ、それだと今度はムスリムとしては筋が通らない。そういう矛盾は感じつつも、日本人には法理のところから説明をします。残虐な部分だと言われているところを、法理に戻しながら、日本社会にも逆の残虐性があるでしょ、と。

松山 ムスリムのあいだでは、誰でも罪を犯し得るというのは共通の認識ですので、一度罪を犯した人を「完全な悪」として葬り去るということはありませんよね。

内藤 しないですよね。

松山 日本では、特に最近、社会的に善と悪をくっきり分ける傾向があります。例えば中東に関連して言えば、いわゆる「テロリスト」とみなした集団を「悪」と決めつけ、対話や理解の対象から外してしまう。

ISひとつの暴走より、中東諸国の〈チキンレース化〉が危機を深刻化

内藤 IS なんかについては、ものすごいテロ組織だから潰すんだ、と言う。たしかに彼らのやっていることはまったくろくでも無い。しかし、「サイクス・ピコ協定によって策定された国境なんて我々には何の関係もない」というあの部分は正論なんですね。アサド政権と IS は別に敵ではないですよね。だってシリアっていう国をどうしたいかなんて関心は IS にはないので。自分たちの国を作るって言っているだけなんです。これを単にテロリストだから殲滅してしまえと武力で攻撃しても成功しないと思います。できないならば何か他の方法を考えなければいけない。やはり一種の講和をするか……。しかしそれも無理でしょうね。周りは全て領域国民国家を名乗っちゃっているわけで、それ以外のものの存在は、国際法上も国内法上も認めていない。これがすごく深刻な問題です。

中田 確かにその通りだと思います。実は、イスラーム諸国とヨーロッパやアメリカとの講和条約というのは、簡単にできるんですよ。できないのは、イスラーム世界の内部。IS と、例えばサウジアラビア、あるいはイランとの間の講和というのにはあり得ない。そちらがむしろ問題なんです。それに引きずられて世界全体が危なくなるというのが現在の状況です。

IS の問題というのは、アル・カーイダと比較するとわかりやすい。IS とアル・カーイダの一番大きな違いというのは、アル・カーイダは基本的には対西洋。ムスリムの間での違いというのは、できるだけ先送りにして、とりあえず西洋——ロシアとかも含まれますけれど——に侵略されている同胞を助けよう、という方向でやってきた。でも IS はイスラーム世界の内部浄化運動であり、スンナ派イスラームの本来あるべき姿であるカリフ制の再興を目標にかかげ、最初から一番の敵を世俗主義者とシーア派としています。ムスリムが十分にイスラーム的に生きられる場はカリフが統治するイスラーム国しかないので、世界中のムスリムは、皆、イスラーム国に移住してきなさい、と言っているわけです。そしてムスリムを名乗っているがそれに反対する世俗主義者、シーア派こそ最も憎むべき敵というわけです。

イラクの国民の半分以上がシーア派という特殊性もあるんですけど、隣にはシーア派のイランがある、というどうしようもない状況。これは、イスラーム世界の中の問題です。IS はまた、カリフ制を謳っているので、スンナ派というか、イスラームを表に出している政権にとっても、大変な正統性の危機になっています。ですからサウジアラビアはこれをすごく怖がっているわけです。でも最近では、「それよりもイランの方が怖い」という認識にサウジは移りつつあるようです。

サウジのそのような反応には、教義的な面とリアルポリティクスが矛盾して出ています。シーア派の方は、よくも悪くもかなり両方がかなり一体化しているんですね。教義的な教えとシーア派の人民の福利が。スンナ派の方はそうになっていなくて、非常に支離滅裂な態度を取っています。しかも、基本的にはシーア派と、スンナ派——IS とかワッハーブ派のサウジ

アラビアとか——は和解不可能ですので、これらが表に出てきて戦うという形になっている。それに引きずられて世界全体が多極化して、チキンレースになっているわけです。アメリカに加えて中国とロシアが覇権を求め始め、今ロシアでプーチンが IS を攻撃すると、ロシア正教が「聖戦だ」とか言い始めたという状況です（笑）。

内藤 そういう形で本当にチキンレースになっているわけです。それに、現実的な判断をしない IS と、シーア派のイランが加わることによって、誰も制御できなくなる。そういう危機に今陥りつつある。それが非常に危ない。おそらく中東がこのまま流動化すると、ヨーロッパもアメリカも抑えられなくなる。中東からヨーロッパにかけてが酷くて、あまりに亀裂が多すぎる。バラバラに粉砕されてしまったような状態です。もはや、修復不可能な対立に直面しているんじゃないかと思います。

日本が軍事的に平和構築に寄与する可能性はあるのか

松山 日本では安保法案が通りました。アメリカが、日本にいつでも戦争をさせる予定であるのかはわかりませんが、中東の亀裂というか、支離滅裂になったところに、日本がどういう形で巻きこまれていくのか。内藤先生はどうお考えでしょうか。

内藤 とても、初級者の日本が出ていく場面ではないです。最近ロシアがシリア内戦に本格参入しましたが、あれは、シリア政権の要請を受けてロシアが議会で参戦を決めたんです。つまり、シリアがロシアに対して集団的自衛権の行使を求めたんですね。「集団的自衛権」という言葉は使いませんが、構図は完全にそうなんです。弱いシリアがロシアに集団的自衛権を行使して下さいと言って、ロシアがそれを OK した。今現在やっている空爆は集団的自衛権の行使なわけです。ましてや、IS もそうだしヌスラ⁶もそうですけれど、戦時国際法と我々の言っている国際法の枠組みの中に

いない集団と戦うことになりますので、あまりに日本で議論されている事柄は世界とはつながっていない。

具体的に言うなら、安保法制の議論のとき、もしホルムズ海峡が機雷で封鎖されたら、日本に石油が来なくなるので、集団的自衛権の行使が必要になるとかいう話がありました。ホルムズ海峡というのは、一番狭いところで東京駅から立川くらい、33 キロくらいある。そんな距離を機雷でどうやって封鎖するのか、誰が封鎖するのか。そんな突拍子もない想定が出てくるほど、日本はあまりに世界の動きというものから遠くなってしまっている。

私が一貫して反対したのは、今のオバマ政権は引いちゃってますから、次に共和党が出てきて——トランプ（アメリカ共和党大統領候補）は悪夢ですけれどね——強いアメリカを再び主張するだろうと。その時に、簡単に言えば「自衛隊は一緒に死んでくれるって言ったよね？」と言ってくることです。「限定的使用ですから」とかなんとかいうのは日本国内の理屈であって、外には通用しない。後方支援の話も、「後方支援、兵站と前線とは別のもです」とかヌスラに言って、ヌスラが聞くかということ、そんなわけではない（笑）。

さらに言えば、アフガニスタンで長年にわたって人道支援に貢献された中村哲さんも言うておられたけれど、これまでの日本の、武器を使わなかった、特に民間での援助や平和構築の試みというのを、安保法制は粉碎してしまうことになる。

我々を含めて大学で教育に携わっている者は、日本人の世界認識、逆に言えば世界を見えないようにしてしまったということに重大な責任があると思っています。SNS なんかでいくらでも情報が入るようになって、思考そのものがまったく世界に向かって開かれていない。テロ組織を軍事力によって叩いても効果がないのは、IS に 7000 回空爆したって何も消えてないことで明らか。逆に言うと、アサド政権が 9900 発以上の樽爆弾を落として、これだけの難民の奔流を作り出しているわけで、いい加減、軍事力によって物事は解決できないということを今こそ日本は訴えるべきだったと思います。

松山 中田先生は安保法案については？

中田 そうですね、私はそもそも、人定法というのに何の期待も持っていないから、馬鹿馬鹿しいとしか思わない。ただやはり、政治の問題としては、いまだにアメリカは世界第一の超大国ですが、第二次世界大戦後アメリカの軍事的、経済的、外国的優位は不可逆的に衰退していますので、もはや何も考えずにアメリカについていけばいい時代ではなくなってしまったというのは明らかに言えます。特に、あまり日本だと議論されていませんけれど、上海条約機構^⑨というのがあります。これも基本的にイスラームを抑えるためのものです。これは中国が主導しているわけですが、漢民族とトルコ（チュルク）系遊牧民というのは、実は 2000 年以上にわたって戦っている相手どうして、上海条約機構というのは本当のところはトルコ系スンナ派ムスリムを抑えるための仕組みなわけですね（笑）。要するに、トルコ・スンナ派ベルトがあるわけです。ウイグルからトルコまでつながっている。これが一時期はほとんどがロシアというカソ連の配下にあった。これを再びイスラーム化、特にスンナ・イスラーム化させないための機構として上海条約機構というのがある。

それで今、ロシアと中国とアメリカとヨーロッパに、イスラーム世界が加わって、世界が多極化している。ロシアと中国が一緒になってスンナ派のトルコベルトを抑えるという形になっている。そういう文脈の中だとむしろアメリカがトルコの方についてですね、アメリカとロシア・中国・イランが戦うという訳の分からない戦いが今本当に現実味を帯びつつある。しかもそれに実際に火をつけているのが IS なんですね。非国家主体なものですから。で、それに巻きこまれてしまうという切迫感のある状況に、何も分からずに日本が入ろうとしている（笑）。これは実際、法の問題ではなく、政治的にやはりやるべきではない。日本はできもしないことをやるべきではないとは私も思うわけです。

松山 中東・イスラーム研究者が今後果たしていける役割はあるのでしょうか。

内藤 「現実をよく見てほしい」と研究者自身が発言していくしかないですね。中田先生と一緒に見に行ったらけれど、トルコのボスポラス海峡に橋がかかったところあるでしょう。日本がやった第二架橋の。あそこで1.5キロなんですけど、あれの20倍広いんですよ、ホルムズ海峡っていうのは、一番狭いところで。地域研究者としては、世界のいろいろな地域を知っているわけですから、現実を直視するという観点から意見を表明してほしいですね。

ラスボスはリヴァイアサンだった

松山 結局のところ、現在の危機的な状況を作り出している原因は何なのでしょう。領域国民国家の限界が一番大きいのでしょうか。原因が特定できれば、その対策として何をすべきか、そこに宗教者が、あるいは日本が関わることができるのかということもわかってきます。

中田 領域国民国家というか、この場合、領域も国民もとっぱらってみますが、国家の偶像化ですね。国家が神になって、人々が全てを国家に頼りきりであるということ。それが一番問題だという気がします。イスラームというのはもともと神に頼りきる宗教なので、それと対極にあるわけですよ。今だと、民主化運動で「弱者の切り捨てはいけない」というわけですけども、じゃあどうするのかというと、「国家が助ける」ってことになります。国家って何かって言うんですね、結局、国民から奪った税金の化身でしかないんですよ。ですから、国家がどんどん膨れ上がって、人間・個人はやせ細っていく。ソ連とか共産主義とかはそうだったんですよ。個人のはゼロである、国家が全部持っていてそこだけで分配するっていう、一番極端だったところですね。国家と神は同系のものなんですけど、その超越性がなくなっているということです。それがいま問題であると。

それと、みんな「生命が大切だから長生きしましょう」とか言いますが、長生きしても結局は死ぬわけですよ。それなのに、老後の心配とか言って、



松山 洋平氏

イスラーム思想史（神学・法学）を専門とする若手研究者。日本人ムスリム。東京外国語大学大学院総合国際学研究科で博士号を取得。2015年度まで東京大学東洋文化研究所・日本学術振興会特別研究員 PD。日本オリエント学会奨励賞受賞。著書に『イスラーム神学』（作品社、2016年）。

大学生とかが 70 になったとき私どうやって生きていくんだろうと心配している（笑）。

いま生きていることが重要だっということが見えなくなってしまう。それも、いま日本が抱えている根本的な問題ですね。それで、やはり国家が介在する部分がすごく大きくて、国家が神の代わりになっていて、それに頼ればなんでもできると思ってしまう。それが国家をますます肥大化させる。それが偶像崇拜ということであって、本来であれば全ての宗教はそういうものを中和するメカニズムを持ってたはずなんですけども、それが全部国家に取り込まれてしまって、失われて行った。それに一番まだ抵抗しているのがイスラームなんじゃないかと私は思っています。

内藤 やっぱり中東については領域国民国家は無理だったんだろうと思うんですよ。そもそもあの国境になんの根拠もない。ヨーロッパと比べてみるとよくわかるんですけど、ヨーロッパは曲がりなりにも、うちはこういう原理でできた国なんだということを前面に出しますよね。うちはドイツ

だ。うちはベルギーだ。うちはオランダだって。ところが中東の場合は、中途半端に植民地になったり完全に植民地になったりして、第一次大戦の前後に独力で国を作れたのはもともとあったサウジアラビアやイランと独立を勝ち取ったトルコだけなんです。あとの国は概ね第二次大戦後に独立した。で、そもそもその国としてうちはこうなんだ、ってものがあつたかどうかってなると怪しい国がいっぱいある。湾岸の国なんて個人の所有物ですからね。トルコについては、崩壊する寸前のところで強烈な民族意識で国をつくった。しかし、それがゆえに、トルコの場合にはクルド問題だとか宗教と非常に敵対的になるとかそういう問題を引き起こすわけですよ。

シリアみたいな国は、ある意味最も便宜的に国ができてしまった。国境は完全に英仏が引いたもの。そういう国で国民統合、国家統合を実現しようとするば力に頼らざるを得ない。だから独裁者が必要だってことになっちゃうわけです。70年代にレバノンが内戦に陥りましたが、シリア側では内戦が起きなかった。ほらみろやっぱアサドがいるからいいんだとあの時はそうみんな思っていました。ですから、どれが良いとか悪いとかって言いようがないんですけども、現在のシリアでは、不幸にして、今までの歴史的な積み重ねや支配の体制、そういうものが一挙に全部バンと崩壊してしまった。もう歴史を元に戻すわけにいきませんから、その状況でシリアの人々は今後どうしていくのか？おそらく今の状態のあの国には彼らも戻りたいとは思わないと思うんですが、とにかく戦火をなんとかしてとめない限りもうどうしようもない。内戦後のシリアにアサド政権の恐怖の統治が残る限り、難民は戻らないでしょう。人間としてのシリア人は非常にポジティブな志向をもつ人だと思えます。そこに最後の救いを見出して、領域国民国家のダメさ加減を少しでも緩和して国家再建をすることしかならないと思います。

注

-
- (1) 2012年6月27日、同志社大学一神教学際研究センターが、同志社大学グローバル・スタディーズ研究科及び同志社大学アフガニスタン平和・開発研究センターとの共催により開催した、国際会議。内藤氏、中田氏は、この会議の開催において中心的な役割を担った。アフガニスタンのカルザイ政権とタリバン側とに和解をもたらすことを目的とした。イスラーム主義の組織であるタリバンは、1996年からアフガニスタンの政権を握るが、2001年、アメリカ軍の攻撃により崩壊。ハミード・カルザイを大統領とする新政権が成立する。以降、タリバン側はカルザイ政権に対しゲリラ活動を開始し、アフガニスタンは内紛状態が続いていた。
 - (2) タリバンとは別の、アフガンのイスラーム武装勢力。
 - (3) 2015年のシャルリー・エブド襲撃事件とその後のフランス社会の対応を指す。
 - (4) 「サラフィー主義」とは、字義としては「サラフ（正道を歩んでいた初期のスナ派ムスリム）」の道に従う者をいう。近代に生まれたスナ派の復古主義的潮流。サラフィーを自称する諸集団は、多くの場合、既存の法学派の権威や、思弁神学、あるいは現代まで受け継がれてきたスーフィズムの伝統を否定し、それらを後期のムスリムによって創りだされた逸脱と規定する。「ジハーディー（ジハード主義者）」も基本的には「サラフィー主義」であるが、さらに、「シャリーア（イスラーム法）を施行しない為政者、あるいは、その為政者を支持する勢力は、たとえムスリムを自称していても武力によって排除すべき」と考える諸集団をいう。
 - (5) ヌスラ戦線。シリア内戦における反政府勢力のひとつで、アル＝カーイダ系の武装集団。
 - (6) 上海条約機構とは、中国、ロシア、カザフスタン、タジキスタン、キルギス、ウズベキスタン、インド、パキスタンを正式加盟国とする国家連合。不安定化した中央アジアの国境を協力して管理する意味を持つ。